

研究資料 伏彩色螺鈿再考 技法と史的資料から

著者	勝盛 典子
雑誌名	美術研究
号	427
ページ	85-108
発行年	2019-03-28
URL	http://doi.org/10.18953/00008952

研究資料

伏彩色螺鈿再考——技法と史的資料から

勝 盛典 子

はじめに

- 一、一八〇〇年前後のブランク・プラケットの螺鈿作品
- 二、青貝屋の参入
- 三、コック・プロムホフとシーボルトの関係資料
- 四、たばこ入れの検証
- 五、ワット・ラーチャプラディット日本製扉部材の資料的意義

はじめに

一八六四年に建てられたタイの一級王室寺院ワット・ラーチャプラディットの拝殿を飾る日本製の漆扉について、東京文化財研究所はタイ文化省芸術局の依頼で二〇一二年八月に現地調査を実施した。さらに、二〇一三年十月から二〇一五年七月までワット・ラーチャプラディットからの受託研究の形で、螺鈿と漆絵各一点の扉部材を日本に持ち込み、調査及び修理方法の検討を経て試験的な修理が行われた⁽¹⁾。受託研究への協力のため⁽²⁾当該資料を見し現地調査の情報などを提供いただいた段階で、拝殿内側の観音開きの扉（出入口三か所、窓十九か所）すべてを構成する日本製の伏彩色螺鈿六十五点、漆絵三十一一点（当初は伏彩色螺鈿七十六点、漆絵三十八点）の部材は、十九世紀の輸出漆器に関心を寄せてきた筆者にとつて、幕末日本の輸出用伏彩色螺鈿の基準資料となる可能性を感じさせる魅力的な存在であった。筆者自身の問題として、製作地や様式・技法の変遷についていまひとつ明確な指針をたてることができていない十九世紀の輸出漆器の研究を進める契機になることを期待し

て、現地調査から受託研究まで関わってこられた二神葉子・山下好彦両氏とともに、ワット・ラーチャプラディットの漆扉との関係を念頭に、長崎歴史文化博物館、シーボルト記念館、神戸市立博物館、たばこ塩の博物館の協力を得て、「幕末期伏彩色螺鈿製品に関する基礎調査」を実施した。限られた所蔵館における調査にとどまっておらず、課題考察に必要な作品を網羅できていないこと、ワット・ラーチャプラディット他タイ所在の輸出漆器との比較も十分ではない段階であるが、本調査とこれまでに蓄積した史的資料などを併せて整理し、東京文化財研究所の研究会において報告した⁽⁴⁾。

本稿は、研究会において提示した伏彩色螺鈿の輸出漆器関係年表（未定稿）を改訂した上で、本年表（後掲）を軸に「幕末期伏彩色螺鈿製品に関する基礎調査」における技法についての知見と史的資料を援用しながら伏彩色螺鈿について再考し、ワット・ラーチャプラディットの漆扉を輸出用伏彩色螺鈿の基準事例として位置づけることを目的とする。

なお本稿では、作品名や引用文を除いて、原則として具による加飾技法については「青貝」の呼称を用いず「螺鈿」に統一した⁽⁵⁾。

一、一八〇〇年前後のブランク・プラケットの螺鈿作品

十九世紀の伏彩色螺鈿の輸出漆器を考える前段階として、製作年や製作事情が判明するブランク・プラケットの存在が知られており、先学による論考が蓄積されている⁽⁶⁾。銅板に漆を焼き付け蒔絵によつてヨーロッパ製の銅版画の図を表現することを発案したのは、天明七年（一七八七）から翌年まで出島に医師として滞在したスウェーデン国籍のストウツェル（J. A. Stuzer）という。彼の日記に表れる《サンクト・ペテルブルク風景図蒔絵ブランク》（国立歴史民俗博物館・挿図1）の裏面（挿図2）には、螺鈿による花枝文の装飾がある⁽⁷⁾。《聖コンスタンザ教会図ブランク》（ピーボデイ・エセックス博物館）および《コルシーニ宮蒔絵ブランク》（東京国立博物館）にも、裏面に同様の花枝文の螺鈿装飾が施されている。一方、一七九二年の「Sasajia」銘が確認できる《ドガールバンク海戦図蒔絵ブランク》三種と《カディス海戦図蒔絵ブランク》（《ローマ景観図》の裏面については未詳）の裏面には螺鈿の装飾が見られ

挿図1 《サンクト・ペテルブルク風景図蒔絵プラーク》表面 国立歴史民俗博物館蔵

挿図2 《サンクト・ペテルブルク風景図蒔絵プラーク》裏面 国立歴史民俗博物館蔵

ないが「SASAYA」銘のある一七九七年と一七九九年の戦鬪図をテーマとした《エグモント（カンペルダイン）海戦図蒔絵螺鈿筆筒》（プリンス・ヘンドリック海事博物館）や《戦鬪図（ベッテンとカラントスウオーフ間へのイギリス軍の上陸図）蒔絵螺鈿筆筒》（アムステルダム国立美術館）では蒔絵と螺鈿の併用が見られ、笹屋も一八〇〇年頃には螺鈿装飾を用いていることが確認できる。ところで、《戦鬪図蒔絵螺鈿筆筒》については、この書簡筒と同じ銅版画を典拠とする輸出漆器の下絵をアムステルダム国立美術館が所蔵しており、下絵に付された貼紙には技法についての指示が墨書されている（詳細は後掲年表九七頁参照）。このほか輸出漆器例と対照できる「出島図」など、同美術館が所蔵する一括の漆器下絵やトヨタコレクション（産業技術記念館）に収蔵される関係資料は笹屋旧蔵と考えられ、京都における輸出漆器製作の工程を示す点で特に貴重な情報といえよう。⁽⁸⁾ また、「Sagata」銘のプラーク原画（レイツ画 マリアヌス彫）とは異なる「英蘭海戦図」の銅版画シリーズを原図とする《ドガーバンク海戦図プラーク》四種（長崎歴史文化博物館）の裏面は、蒔絵によって銅版画の銘文と紋章を記し、その上下を蒔絵の花枝文様で装飾する（挿図3）。この時期に、蒔絵と漆絵、そして螺鈿が輸出漆器の装飾に用いられていたことが知られ

るが、装飾技法の違いが発注者の意思によるものか、受注者の違いによるものかの判断ができる材料は今のところない。ピーボディ・エセックス博物館に所蔵される一七九九年と一八〇一年のアメリカ向け輸出漆器や一八〇〇年のホーエンリンデンの戦いとマレンゴの戦鬪を主題とする《ヴィクトル・モロー肖像図蒔絵プラーク》《ナポレオン・ボナパルト肖像蒔絵プラーク》（いずれもミュンスタール漆芸美術館）、それらを組み合わせた《ヴィクトル・モロー肖像図蒔絵プラーク》（神戸市立博物館・挿図4）など、一八〇〇年前後までに製作年代を絞ることができる螺鈿装飾のある作品において伏彩色は認められない。⁽⁹⁾

挿図3 《ドガーバンク海戦図プラーク》D 裏面 長崎歴史文化博物館蔵

その例外が、各所に分蔵される《フリードリヒ二世肖像図プラケット》である。これらは商館長ファン・レーデ・トット・デ・パルケレル（在留期間…一七八五—一六、一七八七—九）の一七九三年の収集品リスト中、ひとつは彩色を伴った漆塗り、もうひとつは螺鈿を象嵌したものとするフリードリヒ二世の二点の長方形の肖像に対応する作品と想定されている。⁽¹⁰⁾ 筆者は元リストを確認できていないが、ヨルグ氏論文にある「彩色を伴った漆塗り」に対応する漆絵と蒔絵の併用作品と、「螺鈿を象嵌したもの」に対応すると想定される伏彩色螺鈿による作品（詳細は後掲年表九六頁参照）があり、この段階で伏彩色螺鈿が登場する。しかし、着色の肖像画を伏彩色螺鈿で表現する製作年代の明らかな次の基準作となると、天保元年（一八三〇）の《シーボルト妻子像螺鈿嗅ぎたばこ入れ》（シーボルト記念館）および《いね肖像螺鈿嗅ぎたばこ入れ》（ライデン国立民族学博物館）をまたなければならぬ。⁽¹¹⁾ この間、どのような変化があったのか、青貝屋の登場を見ていきたい。

二、青貝屋の参入

文化三年（一八〇六）、オランダ商館長ヘンドリック・ドゥーフ（一七七七一—一八三五）は参府途中、京都の青貝屋店先の青貝器物乗物類に目をとめ、阿蘭陀宿を通じて注文する。青貝屋は見本を渡されて青貝細工を仕立て、参府帰途四月下旬に注成品を納め、六月には長崎まで下り出島出入り商人となった。青貝屋はこの年、出島在留のオランダ人から三十貫目の注文を受けることになる。⁽¹²⁾三井家に例年の借財についての御札と願いを記した文書から判明する、青貝屋が阿蘭陀商売に関わるようになったいきさつであるが、この手際の良さはドゥーフがこの年以前に青貝屋についての何らかの情報を知っていたことを想定させる。《フリードリヒ二世肖像図プラケツト》の例からも、これまでに京都において伏彩色螺鈿の商品はある程度オランダ人の注文に応じて製作されていたと考えるのが妥当であろう。ドゥーフはそうした商品を本格的に貿易に組み込むために青貝屋を出島出入り商人に引き込んだと考えられる。

青貝屋は、文化十年（一八一三）のイギリス船（アメリカ船と理解）による従来とは異なった注文にも対応していることや、文化十一年の注文リストの内容（大文庫、小文庫、尺四寸盆、絵具箱、針さし、糸巻箱、剃刀箱、茶入箱銅地、指金箱、たはこ入れ、旅櫛箱、銅地薬入、式尺銅地盆、こつふ台、筒たはこ入）などをみると、さまざまなタイプの漆器、例えば素地が銅の注文にも応えていることがわかる。これまで輸出漆器を扱ってきた笹屋などの店も当然複数存在しており、本稿において提示できているのは青貝屋を中心とした限られた資料ではあるが、一八〇〇年ごろまでプラーク、プラケツト、箆筒といった平面作品や大型の家具が中心であった輸出漆器が、青貝屋の参入を機にバラエティー豊かな比較的小型の器物へと移行していることが読み取れよう。オランダ本国が窮地にあったこの時期、商館長ドゥーフが長崎貿易を継続していくための窮余の策であったのかもしれない。

三、コック・ブロムホフとシーボルトの関係資料

青貝屋参入以降の輸出漆器について、確実な情報をもつ実物資料は限定されてい

伏彩色螺鈿再考——技法と史的資料から

たが、近年、海外に所蔵されるコレクションや資料の調査が進み、それらの情報が公開されている。そのひとつが『ライデン国立民族学博物館ブロムホフ蒐集目録——ブロムホフのみせたかった日本——』（臨川書店、二〇一六）である。長崎出島のオランダ商館の荷倉役、商館長を歴任したヤン・コック・ブロムホフ（一七七九—一八五三）による収集品の手稿目録を翻刻・翻訳して刊行したもので、そのリストの四四八番に対応する《風景図に花鳥蒔絵螺鈿絵具箱》が写真付きで紹介されている。目録には、「四四八、螺鈿を施し金色で縁取りした黒塗りの美しい絵具箱一点。内外が互いにびったり合う、仕切り付の引き出し（*see*）からなり、その中には、*A*・上から一番目の引き出し（後略）」などとある。三段の絵具箱の蓋には中央の枠内に山水図、その周辺に尾長鳥と花枝文があり、螺鈿の装飾の一部に伏彩色（赤）が施されているように見える。また、側面は金銀の蒔絵と漆絵によって尾長鳥と花枝文が表されていると思われる。残念ながら写真からの推定に過ぎないが、目録の翻刻により本作品についての製作年代はほぼ確定できることから、作品情報が揃えばこの時期の基準作例となる。

また、日本研究で知られる外科医シーボルト（一七九六—一八六六）関係の資料

挿図4 《ヴィクトル・モロー肖像図蒔絵プラーク》 神戸市立博物館蔵

挿図5 《青貝細工ヴィーナスにアモール図煙草入れ》 神戸市立博物館蔵

についても精度が上がり、作品情報もクリアになってきている。例えば、「フォン・ブランデンシュタイン家所蔵、一八二五―二七年シーボルト関係書簡の翻刻ならびに翻訳」〔『鳴滝紀要』一七、シーボルト記念館、二〇〇七〕において翻訳された《シーボルト宛 ゲオルク・ヨーゼフ・コルマンおよびジョセフィーネ・コルマン書簡 一八二六年六月三日》《シーボルト宛 G. J. コルマン書簡 一八二六年六月二十一日》からは、煙草入れの注文に関する具体例を知ることができる。そのうえで、シーボルトの伯父ヨハン・バルトロメウス（一七七四―一八一四）の肖像画を原図とする《バルテル肖像螺鈿嗅ぎたばこ入れ》（ライデン国立民族学博物館）を検証するとき、同種の作例が多く注文された形跡をみとることができよう。

《バルテル肖像螺鈿嗅ぎたばこ入れ》は、《シーボルト妻子像螺鈿嗅ぎたばこ入れ》

と同じく円形の印籠蓋造の合子で、合口部が内にすぼまったこの形はヨーロッパの嗅ぎたばこ入れと同じ形式である。肖像は銀箔に墨線⁽¹³⁾のみの伏彩色螺鈿で表現されている。こうした墨線だけの表現は、例えば《青貝細工ヴィーナスにアモール図煙草入れ》（神戸市立博物館・挿図5）のヴィーナスとアモールの部分や、《G. A. G. P. ファン・デル・カペレン肖像螺鈿嗅ぎたばこ入れ》《カレル・ラーベンハウプト肖像螺鈿たばこ入れ》（いずれもアムステルダム国立美術館）などにも見ることができ。特に、蒔絵技術に秀で、ヴィーナスとアモールを表す墨線が繊細な《青貝細工ヴィーナスにアモール図煙草入れ》は、周辺の花模様などに赤と黄色の伏彩色が施されるが、伏彩色螺鈿の一般的な作例とは一線を画しており、伏彩色螺鈿の早い時期の作例とみてもよいのではないかと考える。

四、たばこ入れの検証

伏彩色螺鈿の基準作品を検討するために始めた調査ではあったが、その範囲はかなり限定的で当初の目的には届いていない。そのなかで、文献資料や基準作例との対照が可能で、ある程度まとまって調査を実施した煙草入れについて、若干の考察を報告したい。なお、作品の技術的な知見については山下好彦氏に負うところが大きい。

先述の《青貝細工ヴィーナスにアモール図煙草入れ》（神戸市立博物館）とはタイプが異なるが、《青貝細工出島家屋図煙草入れ》（神戸市立博物館・挿図6）は、箱側面の花枝文の螺鈿に《ヴィクトル・モロー肖像図蒔絵プラーク》（神戸市立博物館）と通じる繊細な表現が見受けられる。また、家屋の障子や木目などを螺鈿の上から描いている点もプラークと共通する点として挙げられる。また、《青貝蒔絵人物図嗅ぎたばこ入れ》（たばこ塩の博物館・挿図7）は、図様の一部に貝を貼ったのちに、金銀の蒔絵や微塵貝、錫粉などを用いた複雑な工程を経て製作された例である。《青貝蒔絵大井川図嗅ぎたばこ入れ》（たばこ塩の博物館・挿図8）も蒔絵装飾を主体としている。蓋表は蒔絵で大井川図を表し、側面に伏彩色のない螺鈿（毛彫りあり）で草花文様を配している。本作の内側には商館長コック・ブロムホフの旧蔵品と読み取れる貼紙「Japansch goud / boedel / Kock Blomh □ / + 1800」があり、この

貼紙を信じれば、商館長在任期間を下限として想定できる。

青貝屋参入以降の資料で確認すると、煙草入れの初出は文化十一年（一八一四）のコック・ブロンホフらの青貝屋への注文リストで、「たはこ入れ」と「筒たはこ入」とある。文化十四年の注文リストにも「たはこ入れ」「厚貝入たはこ入」と見える。「厚貝入たはこ入」は、伏彩色のない螺鈿装飾ということだろう。ここで注目されるのは「筒たはこ入」である。

『御用唐木細工物雛形』（文政十二年成立 長崎歴史文化博物館）は、長崎の御用唐木細工師が、石谷備後守（宝暦十二年（一七六二）六月補職）から大草能登守（天保四年（一八三三）五月転免）まで、歴代の長崎奉行に献上した唐木細工の雛形に、寸

挿図6 《青貝細工出島家屋図煙草入れ》 神戸市立博物館蔵

法・材質・文様・技法などを注記したもので、十八世紀中葉から十九世紀第一四半期にかけて長崎で製作された唐木細工の様式や傾向のほか、長崎奉行が職人たちに求めた「異国趣味」工芸の内容を読み取ることができる。その顕著な例として、間宮筑前守（文政元年（一八一八）四月補職）が注文した「御カウクル」があげられる。カウクルとは筒を意味するオランダ語の *kooker*、*koker* のこと、すなわち「筒煙草入れ」である。特殊な形態の細工物であり、舶載のオランダ製煙草入れを参考に唐木細工師が製作したものと思われる。オランダからの輸入品であれ輸出漆器であれ、いずれにしても「筒煙草入れ」が長崎奉行の目にとまり注文するに至っている。この輸出漆器の実例が

挿図8 《青貝蒔絵大井川図喫ぎたばこいれ》上：表面、下：貼紙 たばこと塩の博物館蔵

挿図7 《青貝蒔絵人物図喫ぎたばこいれ》 たばこと塩の博物館蔵

《青貝細工蘭文字蒔絵たばこ入れ》(たばこと塩の博物館・挿図9)である。蓋付の円筒形で、素地は銅製。本体に蒔絵銘「Cr. Ls. Daside」がある。貝はあわびを用い、鳥は裏に銀箔、表面に毛彫りが施され、鶏冠部分には裏彩色(赤の顔料)。梅花(白)は裏に銀箔、花や黄色の花にも裏彩色(顔料)が施される。

シーボルト宛の書簡を見てもわかるように、内側に注文主や贈る相手の名前を入れるなど、それぞれ個別の注文があった様子がうかがえる。文政十二年(一八二九)の『商館長日記』には、青貝屋の螺鈿製品を具体的に示す記述「バラの花東文螺鈿煙草入れ」「日本風景図螺鈿喫ぎ煙草入れ」という記述もある。そうしたなかでも、伏彩色の見られない作例《青貝尾長鳥に切枝文様喫ぎたばこいれ》(銅製、伏彩色なし、毛彫りあり、蓋裏に蒔絵サイン「MJ. J. A. Vollenhove」)(たばこと塩の博物館・挿図10)、《青貝岩に花樹文様喫ぎたばこいれ》(銅製、伏彩色なし、裏箔なし、毛彫りあり)(たばこと塩の博物館・挿図11)については、比較的早い時期に位置づけられよう。

さて、「タキからシーボルト宛書簡」(ベルリン日本協会)によって、天保元年(一八三〇)にシーボルトの妻たきがシーボルトのために注文したことが判明する(シ

挿図9 《青貝細工蘭文字蒔絵たばこ入れ》上：全体、下：蓋上面
たばこと塩の博物館蔵

ーボルト妻子像螺鈿喫ぎたばこ入れ》(シーボルト記念館・挿図12)と《いね肖像螺鈿喫ぎたばこ入れ》(ライデン国立民族学博物館)の伏彩色螺鈿を用いた写真表現は、ここまでの基準作例に比較できるものがない。シーボルトとの深い関係性が確認できる青貝屋(京都)に依頼したものか、肖像画の画風から長崎の画家が関与しやすい長崎で製作したものか、判断に迷う。約四十年前の《フリードリヒ二世肖像図ブラケット》からどのような過程を経てこのような表現にたどりついたのか。この間を埋める資料はもう少し必要であろう。

長崎貿易の不調であった天保年間には、青貝屋の逼塞が文書より知られる。こうした状況下、天保十一年(一八四〇)には長崎の業者の参入が認められる。この時期の輸出漆器の傾向を検証することは難しいが、オランダ船の協荷物掛が、山水文様を好むビッケル(一八三九―四四)から花鳥文様を好むデルブラット(一八四五―四九)に交代したという情報のみではあるが、例えば、前者に《青貝山水文様喫ぎたばこいれ》(たばこと塩の博物館・挿図13)(銅製、蓋裏に蒔絵サイン「A. Reure?o」赤い顔料の伏彩色螺鈿、毛彫りあり)などを想定することは無謀だろうか。

挿図10 《青貝尾長鳥に切枝文様喫ぎたばこいれ》 たばこと塩の博物館蔵

挿図11 《青貝岩に花樹文様喫ぎたばこいれ》 たばこと塩の博物館蔵

五、ワット・ラーチャプラデイト日本製扉部材の資料的意義

ここまで紹介してきた輸出漆器については、京都において製作されたものと判断している。それは、笹屋、青貝屋ほか京都の漆器業者が長崎貿易において機能していたと考えるからである。しかし、天保年間以降に、京都の業者から長崎の業者に実権が移り、いずれかの時点で輸出漆器（伏彩色螺鈿の商品）の製作場所も京都から長崎にほぼ完全移行していく。

青貝屋、笹屋ともに天保年間も輸出漆器商として商売を継続しているが、弘化年間の有力漆器業者として名前の挙がる豊後町尾道屋（尾道八郎）、袋町松屋（石崎太兵衛）が天保十一年には新規参入している。彼らは地元の利を生かし、通詞（長崎の地役人）を通じてオランダ人との取持ちを依頼するなど、京都の業者が不利となる事態に陥っている。また、天保十二年にオランダ貿易を再開した有田磁器のブランド「蔵春亭」と伏彩色螺鈿漆器のコラボ商品が開発される。これについても、「八幡町に住して元は長崎陶山（亀山）の画工たりしが後ち青貝細工に志して遂に其一派を施したるが其功績また視るべきものありたる」という松尾政治という人物の存在を見ると、京都の業者は関与できなかったであろう。さらに、嘉永元年（一八四八）には、唐人屋敷の商人との取引が増えてきた青貝細工について、細物屋（小間物屋

笹屋や青貝屋などの商人を指す）が独占販売の権利を主張したところ認められず、金具屋、遠眼鏡又は方針屋等、長崎の工芸商がそれぞれ青貝加飾して貿易する実態を示す資料が存在する。⁽¹⁴⁾これにより、長崎製の伏彩色螺鈿製品が中国商人の手を経て輸出されることが判明し、タイへの輸出経路の重要な候補として中国商人の存在を挙げることができる。

ワット・ラーチャプラデイトが創建される前後の笹屋と青貝屋の状況を確認しておく、青貝屋は、嘉永六年（一八五三）に完全に長崎商売から身を引き、青貝屋の屋号は長崎の業者（半田民助）に引き継いでいる。笹屋については、文久二年（一八六二）に出島出店商人として名前の見える「笹屋勝次」が京都「笹屋」の出店であるかどうか不明である。また慶応二年（一八六六）には、それまで「定式出入商人」として名前が挙がっていた「笹屋喜介」となる。笹屋は業者として継続しているので無視することはできないが、ワット・ラーチャプラデイトの扉については、長崎における輸出漆器業者の活況と次に述べる漆絵についての情報から、新興の長崎の業者が関わったものと筆者は考える。

ワット・ラーチャプラデイトの扉は、上下の伏彩色螺鈿の部品の中央の漆絵によって構成されている（図版七・八）。この漆絵のひとつに「叟鄰／画指／蒔絵工／六十六／壬戌」と読める落款があり、製作年が文久二年（一八六二）とほぼ限定できる。

日本で修理・公開された漆絵（図版八(a)）の図様と長崎の画家石崎融濟（一八一〇—一六二筆）「和合神図」（長

挿図12 《シーボルト妻子像螺鈿嗅ぎたばこ入れ》
シーボルト記念館蔵

挿図13 《青貝山水文様嗅ぎたばこいれ》 たばこと塩の博物館蔵

挿図14 石崎融濟筆「和合神図」長崎歴史文化博物館蔵

崎歴史文化博物館・挿図14)がほぼ共通すること、長崎において漆絵などを手掛けた黒川家の存在が理由のひとつとして挙げられる。代々漆目利を勤めた黒川家旧蔵の「長崎塗堆朱製造来由」(長崎歴史文化博物館)には、「祖先黒川勘右衛門ハ三河国出生故有テ当地ニ来往ス然ルニ寛文十一辛亥年当地奉行牛込忠座衛門殿在勤中唐塗堆朱製造並油蒔絵ノ秘術唐ノ人ヨリ伝習可請者ヲ被撰候折ノ右勘右衛門儀兼テ漆細工ニ手ノ練致シ居ル旨被及聞而述ノ秘ノ伝ヲ請候様下命ヲ請伝習中ノ唐通事通弁ヲ以テ塗堆朱製ノ造彫刻並油蒔絵共全ク皆伝ヲ得タリ尤油蒔絵ハ近來休業スノ祖先勘右衛門ヨリ私迄十代連綿ノ本年明治十四年迄式百拾年間ノ印籠菓子器香合其他ノ器ノ物好ニ応ス其器地(土器竹木紙金物)等ヲ以テ不相変塗堆朱製造彫刻ノ長崎県長崎区ノ東上町三拾七番戸ノ黒川正英ノ花押」とあつて、習得していた「油蒔絵」について近來は休業していたと記す。黒川正英は明治十七年に七十二歳で亡くなつてゐる。漆絵が「油蒔絵」にあたるかどうかは問題となるところではあるが、例えば、長崎くんちに西浜町が出している龍船を飾る花鳥図(漆絵)の存在もあり、幕末から明治にかけて、長崎においてこうした漆器が製作されていた可能性は高いと考える。

これまで、長崎製の伏彩色螺鈿の基礎資料として浅田家旧蔵の『青貝蒔絵雛形控』(安政三年)や林家(丸一家具)旧蔵の『明治十一年 塗物雛形控』が重要視されてきた。「雛形」との照合によつて作品年代がほぼ判明することもあるが、「雛形」は、作品の形や大きさを同定する材料となるものであつて、伏彩色螺鈿の基礎資料としては確実とはいえない。この点において、ワット・ラーチャプラディットの扉部材

は、伏彩色螺鈿の技法そのものを比較することが可能である。本稿において詳細に立ち入ることはかなわないうが、例えば『青貝梅笹バラに雀文様嗅ぎたばこいれ』(たばこと塩の博物館蔵・挿図15)の、裏彩色螺鈿で表された雀の赤茶とこげ茶色は、ワット・ラーチャプラディットの上部に配された花鳥図の伏彩色螺鈿に近い。ワット・ラーチャプラディットの扉部材に用いられた貝の状態や裏彩色の絵具や色遣い、各部モチーフなどを他の資料と併せてみていくことで、長崎製伏彩色螺鈿製品の基礎情報が整理されていくものと期待している。

挿図15 《青貝梅笹バラに雀文様嗅ぎたばこいれ》たばこと塩の博物館蔵

ワット・ラーチャプラディットの

日本製扉部材は、これまで比較的大きく年代設定されてきた伏彩色螺鈿について、製作年代をある程度絞り込み、長崎製の伏彩色螺鈿の特性を把握することを可能にする点においてその資料的価値は高いものといえよう。また、それ以前の輸出漆器としてワット・ナーンチーの扉部材、さらにタイの王宮に納められている日本製の漆器についての調査が進むことによつて、十九世紀の長崎貿易について、新たな一面が見えてくるのではないだろうか。

註

(一) 二神葉子「ラチャプラディット寺院扉及び日本産伏彩色螺鈿に関する調査」『受託研究「ラチャプラディット寺院の螺鈿扉修復計画作成のための調査研究」調査研究報告書』東京文化財研究所、二〇一五、一一頁。

(2) 二神葉子前掲註1、二二―二三頁。

(3) 勝盛典子「近世長崎における漆器製作と輸出について―日本の文献史料を中心として―」(『近世輸出工芸品の保存と修復』東京文化財研究所、二〇〇〇)、同「十九世紀の輸出漆器―青貝屋における阿蘭陀商売の端緒から終焉まで―」(『近世輸出工芸品の保存と修復Ⅱ』東京文化財研究所、二〇〇二)、同「十九世紀の輸出漆器・補遺―青貝屋の文政・天保期を中心に―」(『第三十一回文化財保存修復研究協議会(近世輸出工芸品の保存と修復Ⅲ)』東京文化財研究所、二〇〇三) ほか。

(4) 「ワット・ラーチャプラディットの日本製扉部材と伏彩色螺鈿に関する研究会」(二〇一八年七月三十日)。十名の発表者によって多角的な研究報告がなされた。二神葉子「ワット・ラーチャプラディットの日本製扉部材と伏彩色螺鈿に関する調査研究の概要」、山下好彦「江戸時代後期の薄貝螺鈿技法に関する考察―ワット・ラーチャプラディット寺院螺鈿扉と輸出漆器」、勝盛典子「伏彩色螺鈿再考―技法と史的資料から」は、いずれも「幕末期伏彩色螺鈿製品に関する基礎調査」を踏まえて発表した。なお、勝盛が本報告に用いた調査結果は、三者共同の知見・見解によるものである。

(5) 青貝は夜光貝、鮑貝、蝶貝、鸚鵡貝など螺鈿の材料に用いる貝の総称。また、それらを用いた加飾技法である「螺鈿」の異称。中国で成立したと考えられる「螺鈿」という語に代って、日本においては室町時代以降「アラガイ」「青貝」という表現がみられるようになる。近世においては、各種の記録上「螺鈿」に代って「青貝」が頻出、第二次世界大戦前後まで「青貝」という呼称は一般的であった。近年、厚貝法を「螺鈿」、薄貝法を「青貝」と称する場合がある一方、幕末から明治期にかけて長崎において輸出用に製作された螺鈿細工について「青貝」が用いられる他には、「螺鈿」の呼称が使用されることが多い。

(6) 高野明「十八世紀の日本工芸品『ペテルブルグ風景』(クンストカメラ旧蔵)」(『日本歴史』二二二、一九六六)、吉村元雄「江戸時代の輸出漆器―「ササヤ」在銘の蒔絵について―」(『在外日本の至宝工芸』一〇、毎日新聞社、一九八二)、岡泰正「江戸時代後期の漆工品に見る洋風表現について」(『國華』一三三三、二〇〇六)、日高薫「肖像図蒔絵プラークの原因に関して」(『国立歴史民俗博物館研究報告』二二五、二〇〇六)。

(7) 高野明前掲註6。

(8) 幕末の笹屋は、安政六年(一八五九)に「定式出入商人」として「塗物類 三条河原町西へ入 笹屋勘助」、文久四年(一八六四)の『都商職街風聞』に「塗物間 寺町三条下 笹や喜介」とある。喜介が勘助の跡を継いだとすると、笹屋の最後の足取りは、明治十年(一八七七)「諸塗物 下京区寺町三条下 俣野喜介」(『京

伏彩色螺鈿再考―技法と史的資料から

都名所巡覧記)、同十一年「諸塗器道具類 寺町三条下 俣野喜介」(『買物ひとり案内』、同十三年「下京区寺町三条下 俣野喜介」(『京都名所案内図会』)などあり、「笹屋」を営んでいた人物の姓は「俣野」であったと考えられる。『京漆器 近代の美と伝統 資料編』(光琳出版株式会社、一九八三)に、俣野勘兵衛(明治十三・十九 漆器組合名簿記載、明治二十九 新古美術品展出品)、俣野喜介(寺町三条南 明治十 第一回内国勲業博出品、明治十二 西京人物誌記載、明治十三 漆器組合名簿記載)、俣野半兵衛(明治十三 漆器組合名簿記載)、俣野正之助(明治二十九 五二会全国品評会出品)などがみえるが、輸出漆器業者としての笹屋はこの後廃業したと推測される。

(9) 伏彩色を用いた十七世紀の螺鈿輸出漆器例は紹介されている。日高薫『異国の表象―近世輸出漆器の想像力』ブリュッケ、二〇〇八、二八九―九五頁。

(10) C. J. A. ヨルグ「ヨーロッパ製版画に基いて裝飾された日本漆器について」『神戸市立博物館研究紀要』九、一九八一、九頁。

(11) 筆者は『フリードリヒ二世肖像像プラケット』についてはいずれも調査をしておらず、ここで述べる伏彩色については写真画像による。

(12) 「奉願口上之覚(青貝類外国売込ノ件、但末尾欠)」(公財)三井文庫、本一六七〇―一九。

(13) 筆者は実見していない。銀箔、錫箔、胡粉と、それぞれ解説する文献がある。

(14) 『寄合町諸事書上控帳』(長崎歴史文化博物館)、『日本都市生活資料集成』六(学習研究社、一九七五)に翻刻されている。本資料については東京大学史料編纂所・松井洋子氏にご教示いただいた。

(15) 長崎歴史文化博物館・越中勇氏にご教示いただいた。龍船については未調査である。

(付記)

本稿をなすにあたり、資料調査・画像利用につきまして、長崎歴史文化博物館(越中勇・矢田純子・長岡枝里)、シーボルト記念館(織田毅)、神戸市立博物館(中山創太)、たばこ塩の博物館(湯浅淑子・西田亜未)、国立歴史民俗博物館の各館・各氏には大変お世話になりました。また、一部の人名および作品名の日本語訳につきまして、京都大学名誉教授松田清氏にご教示いただきました。ここに記して深謝いたします。挿図は、図6・11、13、15は勝盛・二神・山下の調査時の撮影、それ以外は各作品のご所蔵者に提供いただきました。また、口絵は東京文化財研究所の城野誠治氏の撮影によります。

(かつもりのりこ・香雪美術館学芸部長)

伏彩色螺鈿の輸出漆器関係年表 (未完稿 2018・12)

- 【凡例】
1. 作品調査を実施していない資料について、文献・写真などで確認できない情報は、不明・未詳・未確認・?などと記載した。
 2. 青貝屋関係事項の参考文献は、特に明記した以外は勝盛典子『近世異国趣味美術の史的研究』(臨川書店、2011)による。
 3. 典拠欄に『沿革史』とある場合、参考文献は【林虎松編『著名物産長崎漆器沿革史』丸一家具合資会社、1903]である。
 4. 《 》は作品名、【 】は典拠および参考文献、「 」内は原則として史料原文を示す。(〈 〉は筆者が判断を加えた情報。
 5. 「 」内において、必要に応じて改行を/で示した。□は判読不明文字。

西暦/元号	《作品》・作品情報・伏彩色螺鈿関係事項	関係者	作品所蔵先・ 【典拠】	摘要・【参考文献】
1787～88 天明7～8	《サンクト・ペテルブルク風景図時絵アラケツク》 素地は銅板、製作者銘なし。 表：時絵。 裏：螺鈿による花枝文散らしの装飾と時絵による紋章(双頭の鷲)と表題「Vue Perspective des Bords de la Neva. en descendant la Riviere entre le Palais dhyvers de Sa Majesté Imperiale et les batinens de l'Academie des Sciences a St. Petesburg (セント・ペテルスブルクの皇帝陛下の「冬の宮殿」と科学アカデミーの建物の間を下る際の、ネヴァ河兩岸の眼鏡絵(透視画))」。 ※表時絵、裏螺鈿による花枝文散らしのアラケツク例《聖コンスタンチン教会図アラケツク》ピーボディ・エセツクス博物館、《コルシニニ宮時絵アラケツク》東京国立博物館。	発案：医師ストウツェル(在留期間：1787-8)	ロシア・クンストカーメラ国立歴史民俗博物館	典拠：マハーエフ(Mikhail Ivanovich Makhayev 1718-70)の「サンクト・ペテルブルク風景」を基にした銅版の眼鏡絵(致道博物館蔵ほか)と同図様。 天明7年(1787)から翌年まで出島に医師として滞在したスウェーデン国籍のストウツェル(J. A. Stutzer)が漆器にヨーロッパ製版画にもとづいた図柄を表現することを発案した最初の人物とされる。「聖ペテルブルク風景と馬上のルートウイヒ15世。これらの原画を彼等(日本人)にもたらし制作を試みたのは余が最初である。この2点の原画は、日本人によつてはじめて模写された。また、余が依頼した他の作品、たとえば海の合戦図などもすこぶる傑作で鑑賞に値する」(ストウツェルの日記)。 【高野明「18世紀の日本工芸品『ペテルブルク風景』(クンストカーメラ旧蔵)」『日本歴史』213、1966】【吉村元雄「江戸時代の輸出漆器―「ササヤ」在銘の時絵について―」『在外日本の至宝』10、毎日新聞社、1981】
	《ルイ15世騎馬像図時絵アラケツク》 素地は銅板、製作者銘なし。 表：時絵によるルイ15世騎馬像図。 裏：未詳。	発案：医師ストウツェル(在留期間：1787-8)か	ロシア・クンストカーメラ	原図：ル・ミール(Noël Le Mire 1724-1800)画 カトラン(Louis-Jacques Cathelin 1738-1804)彫版の銅版画「Louis Quinze le Bien Aimé (ルイ15世騎馬像)」 ストウツェルは日本での収集品を、帰国後にロシアのエカテリーナ2世に献上。日記と対照可能な《サンクト・ペテルブルク風景図アラケツク》と《ルイ15世騎馬像図アラケツク》のほか、《アルティン・ルター》《フリードリヒ2世》《グスターヴ2世》アラケツクが、学士院博物館を経て1795年にクンストカーメラに移管された。日記の「ルートウイヒ15世」が「ルイ15世」の誤りとすれば、左記作品が当該資料となる。 【Japan und Europa(日本とヨーロッパ)1543-1929]Berliner Festsispiele、1993】【岡泰正「江戸時代後期の漆工品に見る洋風表現について」『國華』1329、2006】【日高薫「肖像図時絵アラケツクの原因に関して」『国立歴史民俗博物館研究報告』125、2006】【大英博物館データベース】
1788 天明8	《グスタフ3世肖像図時絵アラケツク》 素地は銅板、製作者銘なし。 表：時絵によるグスタフ3世肖像図。 裏：原図の肖像画下の宝冠・紋章・獅子図とラテン語銘文「Gustavas III tuis Suecorum Gothorum Vandalorumque Rex」に続いて製作情報「Japonia factum 1788 (1778年日本製)」が時絵で表される。ラテン語銘文は原図と異なるか？銘文がラテン語の原図の存在について未確認。螺鈿装飾はなし。		国立歴史民俗博物館	原図：ローレンパッシュ(Lorens Pasch 1733-1805)画 ヤコブ・ヒルペル(Jacob Gillberg 1724-93)彫版の銅版画「Gustaf Den III Sveriges Götches och Wändes Konung... (グスタフ3世)」1773 【C. J. A. Yorlge「ヨーロッパ製版画に基づいて装飾された日本製漆器について」『神戸市立博物館紀要』9、1992】【国立歴史民俗博物館蔵資料データベース】ほか

参考	《ポリドーロ・カルダラ詩絵肖像プラケット》 素地は銅板、製作者銘なし。 表：詩絵による肖像と詩絵銘「POLLIDORE CALDARA, Peintre」。 裏：詩絵銘「Surnommé CARAVAGE, du nom de sa patrie Né à Caravage dans la Lombardie en 1495, Mort à Meïne en 1543」。		神戸市立博物館	原図：ドゥルルー・デュ・ラデアエ (Dreux du Radier 1714-1780) 著『欧州貴顕録 (L'Europe Illustrée)』初版 全6冊、パリ、オズイウーヴル (Michel Odeuvre 1687-1756)、ルブルトン (Le Breton) 書店刊、1755-1765。全599葉のうち、現在20点以上、6巻すべてにプラケットの原図が確認されている。ポリドーロ・カルダラ肖像は第6巻 No.35。
1792 寛政4	《ドガーバンク海戦図詩絵プラケット》3種 (1-3) 素地は銅板。 表：3種とも、詩絵でドガーバンク海戦図とオランダ語 (左) とフランス語 (右) の原図銘文を写す。その下に「Verlakt by Sasaja in Japan. Ao1792。」 裏：装飾なし。	製作：笹屋 (Sasaja 銘)	1-3：アムステルダム国立美術館 3：神戸市立博物館	原図：レイツ (J.F. Reitz 1761-1824) 画「マテニアス・デ・サリエト (Matthias de Sallieeth 1749-91) 彫版の「ドガーバンク海戦図」の、マリアヌス (Joseph Mariannus 1738-88) による異版。1781年に北海のドガーバンク海域で行われた海戦を描く3枚一組の銅版画。1枚目はイントロダクシヨンの戦列、3枚目は海戦の終結 (1781年刊)。 【吉村元雄「江戸時代の輸出漆器―「ササヤ」在銘の詩絵について―」『在外日本の至宝』10、毎日新聞社、1981】
1792 寛政4	《カデアニス海戦図詩絵プラケット》 素地は銅版。 表：詩絵でカデアニス海戦図とオランダ語 (左) とフランス語 (右) の原図銘文を写す。その下に製作者銘「Verlakt by Sasaja in Japan. Ao1792。」 裏：装飾なし。	製作：笹屋 (Sasaja 銘)	神戸市立博物館 アムステルダム国立美術館	原図：ヤン・コベル (Jan Kobell 1755-1833) 画「マテニアス・デ・サリエト (Matthias de Sallieeth 1749-91) 彫版銅版画の、マリアヌス (Joseph Mariannus 1738-88) による異版。「カデアニスに近いデ・サンタ・マリア岬における英蘭海戦図 (カデアニス海戦 1781年5月30日)」。 【視覚革命！異国と出会った江戸絵画―神戸市立博物館名品展―】九州国立博物館、2013】
参考	《ドガーバンク海戦図・カデアニス海戦図》 絹本着色、額2面。 両図とも、海戦図の下部に原図のオランダ語 (左) とフランス語 (右) 銘文を写す。	旧蔵：笹屋か	産業技術記念館 (トヨタコレクション)	「Verlakt by Sasaja in Japan. Ao1792」銘のあるプラケット2点と同じ図様。画面は空の空間部分を引き延ばして縦長の画面とする。
1792 寛政4	《ローマ景観図》 素地は銅板。 表：図の周辺には金銀の研出詩絵による花枝文様と尾長鳥。縁の下段に詩絵で英語 (左) とフランス語 (右) の銘文「ROME in its Original Splendor. / ROME dans Sa Splendeur. Ancienne」。その下に製作者銘「Verlakt by Sasaja in Japan. Ao1792。」 裏：装飾なしか。	製作：笹屋 (Sasaja 銘)	アムステルダム国立美術館	【吉村元雄「江戸時代の輸出漆器―「ササヤ」在銘の詩絵について―」『在外日本の至宝』10、毎日新聞社、1981】 【アムステルダム国立美術館データベース】
	《ドガーバンク海戦図プラケット》4種 (A-D) 素地は銅板、製作者銘なし。 表：詩絵によるドガーバンク海戦図。 裏：詩絵によって銅版画の銘文と紋章を記し、その上下を漆絵の花枝文様で装飾する。		A-D：長崎歴史文化博物館 D：ピーボデア・エセックス博物館	原図：Sasaja 銘のプラケット原画 (レイツ画「マリアヌス」とは異なる「英蘭海戦図」の銅版画シリーズ) A ホーハーヘイデーン (Engel Hoogerheyden 1740-1807) 画「マテニアス (Robert Mays 1742-1825) 彫版の銅版画 1784年刊 B ホーハーヘイデーン画「マテニアス彫 1784年刊 C ホーハーヘイデーン画「マテニアス彫 1784年刊 D ホーハーヘイデーン画「マテニアス彫 1785年刊 【日米交流のあけぼの―黒船きたる―】江戸東京博物館、1999】 【長崎歴史文化博物館データベース】

1793 寛政5	<p>《フリエードリヒ2世肖像図フランクツト》 素地は銅板、製作者銘なし。 1表：沃懸地に漆絵・蒔絵・金貝？による肖像と「FREDERIC II」の蒔絵銘。 裏：「Roi de Preuße et Electeur de Brandeborgu」の蒔絵銘と螺鈿による原因のカルトウーシユ周辺の王の象徴物による装飾。 2表：伏彩色螺鈿による肖像と「FREDERIC II」の蒔絵銘。 裏：「Roi de Preuße et Electeur de Brandeborgu」の蒔絵銘、螺鈿装飾は不明。 3表：伏彩色螺鈿による肖像と「FREDERIC II」の蒔絵銘。 裏：「Roi de Preuße et Electeur de Brandeborgu」の蒔絵銘、螺鈿装飾は不明。 4表：沃懸地に金銀蒔絵・漆絵による肖像と「FREDERIC II」の蒔絵銘。 裏：「Roi de Preuße et Electeur de Brandeborgu」の蒔絵銘、螺鈿による原因のカルトウーシユ周辺の王の象徴物による装飾。 5表：伏彩色螺鈿による肖像と「FREDERIC II」の蒔絵銘。 裏：不明。 6表：伏彩色螺鈿(と漆絵?)による肖像と「FREDERIC II」の蒔絵銘。 裏：「Roi de Preuße et Electeur de Brandeborgu」の蒔絵銘、螺鈿装飾は不明。</p>	商館長フアン・レーデ・トット・ゾ・パルケレーデ(在留期間：1785-6、1787-9) 収集か	1-2：国立歴史民俗博物館 3：ミュージアムター漆器博物館 4-5：アムステルダム国立美術館 6：ライデン国立民族学博物館	<p>原因：アスレーエ(Claude-Louis Deshayes 1746-1816) 画 P. Sullin 彫版の銅版画「FREDERIC II Roi de Preuße et Electeur de Brandeborgu: (フリエードリヒ2世)」 ヨルグ氏によると、商館長フアン・レーデ・トット・ゾ・パルケレーデ(Johan Fredrik van Rheeде tot de Parkeier 1757-1802) の1793年の収集品リストは「フリエードリヒ2世、すなわちフリエードリヒ大王の2点の長方形の肖像、つまり銅像に言及しており、そのうちのひとつは彩色を伴った漆塗りで、もうひとつは螺鈿を象嵌したものであった」という。(Royal Library, The Hague, manuscripts dept. 133 M36/2, no.17, Enclosure 'Note of the goods etc.' Souracarta. 15 Aug. 1793) に対応する作品か。 【G. J. A. ヨルグ「ヨーロッパ製版画に基いて装飾された日本漆器について」『神戸市立博物館研究紀要』9、1981】 【「シーボルトと日本」東京国立博物館他、1988】 【岡泰正「江戸時代後期の長崎製輸出漆器について」『美術史』135、1994】 【日高薫「肖像図蒔絵フランクツトの原因に関して」『国立歴史民俗博物館研究報告』125、2006】</p>
1797～ 寛政9～	<p>《エゴモン(カンペルグイン) 海戦図蒔絵螺鈿算笥》 素地は木製。 上段左扉：蒔絵銘「ZEESLAG TUSSCHEEN DE BATAAFSCHE EN EN ENGELSCH E VLOOTEN OP DE HOOGTE VAN EGMOND, DEN 11 OCTOBER DES IAARS 1797」 上段右扉：蒔絵銘「STAANDE DE BATAAFSCHE VLOOT ONDER BEVEL VAN DEN ADMIRAAL DE WINTER EN DE ENGELSCH E ONDER DEN ADMIRAALDUNCAN」 内側に蒔絵で「LAKWERKER SASAYA」製作者銘あり。 引出は螺鈿と蒔絵で上段に堅田の浮御堂、北良山、唐崎の松、三井寺。下段に石山寺、矢橋の扁輿、膳所城の文様、引出などの外枠に螺鈿による尾長鳥、切枝文様、菊花を中央にした花唐草。</p>	製作：笹屋(SASAYA 銘)	フリンス・ヘンドリック 海事博物館	<p>上から2段目の扉原図：ヘリット・フルーネウエーヘン(Gerrit Groenewegen 1754-1826) 画 レイニール・フインケルス(Reinier Vinkels 1741-1816) 彫版による銅版画「Zeeslag tusschen de Bataafsche en Engelsche vlooten, op de hoogte van Egmond, den elfden october 1797, staande de Bataafsche vloot onder het opperbevel van den Admiraal De Winter, en de Engelsche onder dat van den Admiraal Duncan. Het midden van het gevecht (1797年10月2日、バタビアとイギリス艦隊のエゴモンでの海戦)」 【吉村元雄『在外日本の至宝』10、毎日新聞社、1981】 【フリンス・ヘンドリック 海事博物館データベース】</p>
1799～ 寛政11～	<p>《戦闘図(ベッテンとカラントスウオーフ間へのイギリス軍の上陸図) 蒔絵螺鈿算笥》 素地は木製。 上段左扉：蒔絵銘「HET LANDEN DER ENGELSCHEN TUSSCHEEN PETTEN EN CALANTSOOG」 上段右扉：蒔絵銘「OP DEN ZEVEN EN TWININGSTEN AUGUSTUS DES IAARS 1799」 内側に蒔絵で「LAKWERKER SASAYA」製作者銘あり。 引出は螺鈿と蒔絵で下段に堅田の浮御堂、北良山、唐崎の松、三井寺。</p>	製作：笹屋(SASAYA 銘)	アムステルダム国立美術館	<p>上から2段目の扉原図：ランベンダイク(Jan Anthonie Langendijk Dzn 1748-1805) 画 フラウウエール(Cornelis Brouwer 1771-1854) 彫版による銅版画「Het Landen Der Engelsche, tusschen Petten en Calantsoog, op den 27 Augustus des Jaars 1799 (1799年8月27日 Petten と Calantsoog 間へのイギリス軍の上陸図)」</p>

	上段に石山寺、矢橋の扁軸、膳所城の文様、引出などの外枠に螺細による尾長鳥、切枝文様、菊花を中央にした花唐草。			墨書貼紙 1 「此細き所ハ人形歌共ニ惣蒔絵也」 2 「文字ハ何れも蒔絵也」 3 「此人形地を貝ニ而置銅判之筋を蒔絵ニ為」 4 「此雲かた皆研出し也」 5 「此人形地を貝ニ而置銅判之筋を蒔絵ニ為」 6 「此地形山の形リ共ニ研出し但シ此草のノあしらひ蒔絵」 7 「あひし上之右四枚之下ケ札ノ外之ノ人形ハ不殘青貝ニ而銅判之筋を其辰ノおこし置可被下候」 8 「此はた竿の頂□□□／蒔絵ニ而も貝ニ而も宜敷□□」 9 「此はた青貝ニ而文字置殘」 10 「此人形地を貝ニ而置銅判之ノ筋を蒔絵ニ而成し可被下候」 11 「此筋形之縁此位斗之ノ青貝の筋也」 12 「縁ハ図之ごとく青貝の筋也尤四ノすみにハ花と鳥とをツツ、貝ニ而ノ可被下候」 本図のほかに、アムステルダム国立美術館には笹屋旧蔵と考えられる下絵《出島図》《三方正回棚》《唐船荷物□所》《山水図》《菊図》などがある。 【アムステルダム国立美術館データベース】
参考	戦国図蒔絵螺細書簞笥と同じ銅版画を典拠とする輸出漆器の下絵》 紙本墨書、1枚、貼紙12枚。 銘文は図の下にあり、図様は《戦国図蒔絵螺細書簞笥》と比較すると若干簡略化されている。 楠門枠下にオランダ語銘「Hel Landen / Der ENGELSCHE, tuschen PETTE en, CALANTSOOG, op den 27 Augustus des Laars 1799」。	旧蔵：笹屋か	アムステルダム国立美術館	
参考	《出島図螺細額》 素地は木製、製作者銘なし。 螺細による「出島図」。		アムステルダム国立美術館	寛政10年(1798)大火以前の「出島図」。 【出島図—その景観と変遷】中央公論美術出版社、1987】 【吉村元雄『在外日本の至宝』10、毎日新聞社、1981】 【アムステルダム国立美術館データベース】
参考	《出島図螺細額の図様に近い輸出漆器の下絵》 紙本墨書、1枚。	旧蔵：笹屋か	アムステルダム国立美術館	【アムステルダム国立美術館データベース】
参考	《バタヴィア港図ライネインゴボックス》 素地は木製。 上蓋の中央の楕円中に蒔絵と螺細で原図を写し、その下に蒔絵で銘「DE REEDE VAN BATAVIA」と紋章を、その周辺と箱の側面に螺細の切枝文様。内側に蒔絵で「LAKWERKER SASAYYA」製作者銘あり。	製作：笹屋か (SASAYYA 銘)	長崎歴史文化博物館 アムステルダム国立美術館	原図：Hendrik Kobell (1751—99) 画 フネイアス・デ・サリエト (Matthias de Salliegh 1749-91) 彫版の銅版画「DE REEDE VAN BATAVIA」1779年刊 【アムステルダム国立美術館データベース】
1799 寛政11	3-42 《ナイフ入れ》 漆地に蒔絵で、鳳凰と草花の切枝文様。 3-46 《盆》 黒漆地に螺細で、中央に山水図、その周辺に鳳凰と草花の切枝文様。 3-48 《チルトツプ・テーツル》 黒漆地(脚部)と漆地(天板部)に螺細と蒔絵で、鳳凰と草花の切枝文様。 3-52 《チルトツプ・テーツル》 梨地に蒔絵で、草花の切枝文様。 3-49 《デミルン・テーツル》	ジェームズ・デ・アロー収集、アメリカ向輸出漆器	ピーボダイ・エセックス博物館	ジェームズ・デアロー (James Devereux) 船長のフランクリン号 (Franklin) によるアメリカ (Salem) への輸出漆器。 【日米交流のあけぼの—黒船きたる—】江戸東京博物館、1999】

	<p>黒漆地に螺鈿で、鳳凰と草花の切枝文様。 3-51 《デミルーン・テーブル》 梨地に蒔絵で、鳳凰と草花の切枝文様。 ※いずれも素地は木製、製作者銘なし。数字は図録 No.</p>				
1801 享和 1	<p>29 《ナルトツテ型テーブル》 黒漆地に螺鈿と蒔絵で、鳳凰と草花の切枝文様。 3-1 《盆》 黒漆地に蒔絵でアメリカの紋章、周辺に螺鈿で草花の切枝文様。 3-38 《ナイフ入れ》 黒漆地に螺鈿と蒔絵で、鳳凰と草花の切枝文様。 3-41 《ナイフ入れ》 黒漆地に螺鈿と蒔絵、草花の切枝文様。 3-47 《洋櫃》 黒漆地に螺鈿で、鳳凰と草花の切枝文様。 3-50 《鏡台》 黒漆地に螺鈿と銀で、鳳凰と草花の文様。 ※いずれも素地は木製、製作者銘なし。数字は図録 No.</p>	サミュエル・ダービー収集、アメリカ向輸出漆器	ピーボダイ・エセツクス博物館	<p>サミュエル・ダービー (Samuel Gardner Derby) 船長のマーガレット号 (Margaret) によるアメリカ (Salem) への輸出漆器。 【『日米交流のあけぼの—黒船きたる—』江戸東京博物館、1999】</p>	
1801 享和 1	<p>3-45 《出島図角盆》 素地は木製、製作者銘なし。数字は図録 No. 螺鈿による寛政 10 年 (1798) 大火以前の出島図、上部に英語の蒔絵銘 「The Island of Desima in Japan」。</p>	サミュエル・ダービー収集、アメリカ向輸出漆器	ピーボダイ・エセツクス博物館	<p>サミュエル・ダービー (Samuel Gardner Derby) 船長のマーガレット号 (Margaret) によるアメリカ (Salem) への輸出漆器。 【『日米交流のあけぼの—黒船きたる—』江戸東京博物館、1999】</p>	
1800～ 寛政 12～	<p>《ヴィクトル・モロー肖像蒔絵ブラスーク》 木製額縁に銅板の画面素地。製作者銘なし。 木製額縁の四隅に螺鈿の唐草文、銅板画面に金銀平蒔絵に金金具でヴィクトル・モロー肖像、下段に螺鈿と蒔絵で戦闘図。中段に蒔絵で原因の銘 「VICTOR MOREAU, général en chef de l'année du Rhin Né à Morlaix en 1763」を表す。</p>		ミュンスター芸術美術館	<p>原図：ヴィクトル・モロー (1761-1813) の肖像はアンリ・ジェラール (Henri Gérard 1755-1835?) 画 ルヴラシエ (Charles-François-Gabriel Le Vachez 177?-1841?) 彫版、ホーエンリッペン戦闘図はデウヴリッシ=ベルトー (Jean Duplessis-Bertaux 1750?-1819) 画・彫版による銅版画 「Victor Moreau, général en chef de l'année du Rhin..」 ※ホーエンリッペンズの戦いのあつた 1800 年 12 月以降、あまり経過しない時期の製作か。 【吉村元雄 『在外日本の至宝』 10、毎日新聞社、1981】 【日高薫 『肖像図蒔絵ブラスークの原因に関して』『国立歴史民俗博物館研究報告』 125、2006】</p>	
1802～ 享和 2～	<p>《ナポレオン・ボナパルト肖像蒔絵ブラスーク》 木製額縁に銅板の画面素地。製作者銘なし (ただし《ヴィクトル・モロー肖像図蒔絵ブラスーク》に準じた未確認の情報)。 中段に蒔絵で原因の銘 「BONAPARTE, premier Consul de la République française, le 18 brumaire an VIII」を表す。《ヴィクトル・モロー肖像図蒔絵ブラスーク》と同仕様。螺鈿と蒔絵の装飾。</p>		ミュンスター芸術美術館	<p>原図：デウヴリッシ=ベルトー (Jean Duplessis-Bertaux) 画 ルヴラシエ (Charles François Gabriel Le Vachez) 彫版のナポレオンの肖像と、1800 年 6 月のワレンゴの戦闘図を組み合わせた銅版画 「Bonaparte, premier Consul de la République française, le 18 brumaire an VIII」 【日高薫 『肖像図蒔絵ブラスークの原因に関して』『国立歴史民俗博物館研究報告』 125、2006】</p>	
1802～ 享和 2～	<p>《ヴィクトル・モロー肖像蒔絵ブラスーク》 銅板、製作者銘なし。 表：肖像周辺ブラスークの螺鈿は毛彫りの上から蒔絵。肖像の黒い漆の周囲は金具、瞳は黒漆、白目は銀、髪は金と銀か。</p>		神戸市立博物館	<p>原図：表は《ヴィクトル・モロー肖像図蒔絵ブラスーク》の肖像画と《ナポレオン・ボナパルト肖像蒔絵ブラスーク》のワレンゴの戦闘図を組み合わせている。裏面の螺鈿、蒔絵の装飾は非常に繊細。伏彩色はない。</p>	

	裏：螺鈿と蒔絵。地に平日粉、菊は金具に蒔絵、葉は毛彫りのあとで磨いている。金銀の切金。 ※表・裏とも螺鈿と蒔絵で装飾。				
1803? 享和3?	《トウナー像》 木製、製作者銘なし。肖像は絵画。 螺鈿による唐草文様・幾何学文様装飾の額に「トウナー像」(紙本著色)が納められたもの。蒔絵銘「Hendrik Doeff, Junior Oppehtofd van aol803/ Tot Aol」。貝の装飾は、赤と青の部分を用いて意識的に使用。伏彩色はなし。	旧蔵：諸色売込 人川島家(長崎)	神戸市立博物館	商館長ヘンドリック・ドワーフ(Hendrik Doeff 1777-1835)は、享和3年(1803)に商館長になり、文化14年(1817)の難日まで14年間商館長を務めた。本作の銘は、商館長就任期間の最初を記して最後に空欄としているため、制作動機を商館長就任(1803)、あるいは商館長宅で開催された日蘭友好200年パーティー(1809)と想定するのが妥当か。	
1806 文化3	2月、オランダ商館長ヘンドリック・ドワーフが参府途中で青貝屋に初めて注文。 4月下旬、青貝屋が50両余りの注文品を納品。 6月、青貝屋が長崎に下り、出島出入り商人となる。 青貝屋はこの年、出島在留のオランダ人から30貫目の注文を受ける。	青貝屋	【奉願口上之覚 (青貝屋外売込 ノ件、但未尾欠)】 (公財) 三井文庫 本 1670 - 19】	三井家は中野用助の名前で五ヶ所本商人に加わり、長崎貿易の経営に長く関わった。19世紀に輸出漆器業者となった青貝屋は、中野用助すなわち三井家に資金を頼ったことから、(公財) 三井文庫に大量の青貝屋関係の文書が遺されている。	
1813 文化10	「昨年彼之地平和仕候趣二而、アメリカ国仕出シニ而き渡無滞入津仕難有奉存候、然ル所去々年申年類焼之節卯年仕入品物之内貳拾三貫目余御蔭を以焼残り難有仕奉存候、右焼残り之品出嶋持入仕候所、昨年入津之船者御聞及之通りアメリカ仕出シ船ニ而模様向兼候ニ付、拾貫目余売込外ニ拾四貫目余追注文御座候得共」	青貝屋	【青貝屋仕入銀 借用願】 (公財) 三井文庫 本 1496-35-4】	この年来航したジャーロット号とワリア号は、1811年にバタビアの実権を握ったイギリスのジャヤラ副総督ラツフルズルの命によって派遣されたイギリス船であったが、商館長ドワーフはそのことを日本側には知らせず、オランダ船として通常の取引を行なったが、青貝屋はこの2艘をアメリカ備船と理解した上で、蘭船とアメリカ備船(実はイギリス船)では青貝細工の模様についての注文が異なること認識。	
1814 文化11	荷倉役ヤン・コック・フロムホフ、臨時荷倉役ダイルク・ホーゼンらの青貝屋への注文リストに〈大文庫、小文庫、尺四寸盆、絵具箱、針さし、糸巻箱、剃刀箱、茶入箱銅地、指金箱、たはこ入れ、旅櫛箱、銅地薬入、式尺銅地盆、こつふ台、筒たはこ入)など記載される。	受注：青貝屋武 右衛門・武兵衛	【阿蘭陀人注文 覚 戊二月】(公 財) 三井文庫 本 1496-42】	商館長ヘンドリック・ドワーフの参府年。 ※リストにある「筒たはこ入れ」に近いと想定される作例。 《青貝細工蘭文字蒔絵たはこ入れ》たはこ壇の博物館 素地は銅、円筒形、蒔絵銘「Ct Ls Daside」、蓋付、伏彩色螺鈿具はあわび、鳥：裏に銀箔、毛彫りあり、鶏冠に赤の顔料 梅花(白)：裏銀箔 花(赤)：赤の顔料、花(黄)：顔料	
1817 文化14	カントン号船長、新商館長ヤン・コック・フロムホフほかの青貝屋への注文リストに〈大れつせん、指金箱、小れつせん、常かるた箱、大面取針差、新山高同、茶はこ、筒たはこ入れ、ぼん入れ、金縁盆、大たんす、鳥籠、角台針差、大総具箱、小形同道具入、角剃刀箱、たはこ入れ、日月箱、山高衣装櫃、式尺四寸盆、山平針差、志番文庫、厚貝入たはこ入、新形かるた箱、船形しん物入)など記載される。	受注：青貝屋武 右衛門	【阿蘭陀人注文 物出来下候覚】 (公財) 三井文庫 本 1495-45】	オランダ船ワラウ・アハタ号で新商館長ヤン・コック・フロムホフ(Jan Cock Blomhoff 1779-1853)が妻子を連れて来航、ドワーフは帰国。 1817年の脇荷勘定—オランダと青貝屋との取引が、笹屋を超える。 ※手廻りの品は、翌年(文政元)春の参府途中、京都で納品する→青貝屋の輸出漆器が京都で製作されていることの傍証。 【Cambang Reekening voor Hollander Aol1817】	
1817 文化14	「旧冬方職方何れ茂手間人大勢差入細工為致居申候所、追々手明キ二相成候細工人も御座候二付、外方へ細工ニ参り候趣承り候二付、外方へ細工ニ参り候而者、亦呼寄セ候義も容易ニ相成不申入差支ニ相成候」	青貝屋武右衛門	【青貝屋武右衛 門同武兵衛資金 借用願】(公財) 三井文庫 本 1472-16-11】	注文から納品まで、限られた期間で仕事を仕上げなければならなかったため青貝屋が多くの職人を抱えていた様子が窺える。	
1817 文化14				商館長コック・フロムホフ初めての参府。	

1818 文政元	「間宮筑前守様 御注文ノ一御カウクルノ但シ絵図面之通チヤソノ木拵ニ而蓋者印籠口ニ而銀ノイホハシキ金鑲番付蓋其下之身共々三ツニ開キ其ノ両面ヲ菊唐草ヲ薄肉彫上ケニ仕地石目ニ相仕立」(簡たばこ入れの図付)	製作：三崎代之助	【御用唐木細工 雛形】長崎歴史 文化博物館】	御用唐木細工師が長崎奉行間宮信興(文政元年4月28日補職、文政5年6月14日転免)に唐木細工の「簡たばこ入れ」を献上。輸出漆器を模した国内向けの工芸品が長崎で製作された例。
1818～22 文政元～5	「漆職人がやってきて、盆を検査し、將軍陛下にどうにか献上できるように、脇荷勘定の60テールでそれを整備することに合意した」(11/29)「漆職人のフエモン(青貝屋武衛門)と10枚のお茶のお盆を、一枚当たり6テール、すなわち60テールで直すことに合意した。」(11/30)	受注：青貝屋注文：商館長コック・フロムホフ	【長崎オランダ 商館長日記】	商館長コック・フロムホフ2回目の参府。お茶の盆(輸出漆器か)10枚を將軍に献上するために青貝屋に手直しを依頼。 【長崎オランダ商館長日記】10、日蘭学会、1999】
～1823 ～文政6	《風景図に花鳥蒔絵螺鈿絵具箱》 蓋付三段絵具箱。 素地は木製、黒漆に蒔絵と螺鈿、一部伏彩色か。 蓋：中央の枠内に山水図、上下に尾長鳥、左右に切枝文を螺鈿で装飾。 側面：蒔絵と漆絵?による尾長鳥と切枝文。 ※付属品に絵具(緑青 groen、胡粉 witte)2箱。 ※文化14年(1817)「阿蘭陀人注文物出来下候覚」の「大絵具箱」の実例として想定できる資料。	商館長コック・フロムホフ収集	ライデン国立民族学博物館	商館長コック・フロムホフ(商館長在任期間：1817-1823) 蒐集目録(1826年) ca1448 [RV-360-2532] 「448. 螺鈿を施し金色で縁取りした黒塗りの美しい絵具箱1点。内外が互いにびったり合う、仕切り付の引き出し(lade)からなり、その中には A：上から1番目の引き出し/各種の筆8点。/同上の刷毛5点、鞆をひいたり糊を塗ったりするためのもの。/鞆の羽根1点。/スケッチのための端から端まで焦げた(木炭のような)木片1包み。/ B：2番目の引き出し/緑色の絵の具1箱。/白色の絵の具 同/金の油 1包み。/銀の同 1包み(最上)。/銅の同 1包み。/黄色すなわち雌黄1片。/茶色1片(鉱物)。/1包み、中身は/黄色の小ペン5点/薄青色の小ペン5点/濃青色の小ペン5点/インク1点。/ C：3番目の引き出し/磁器の小椀6点。」 【ライデン国立民族学博物館蔵フロムホフ蒐集目録—フロムホフのみせたかった日本—】臨川書店、2016】
～1823 ～文政6	青貝屋の出島売込代は87貫あまり。	青貝屋武右衛門	【青貝屋武右衛門同武兵衛資金借用願(公財)三井文庫本 1472-16-7】	新商館長ゾ・ステュルレル(Johan Willem de Sturler 1776-1855)と外科医シーボルト(Philipp Franz von Siebold 1796-1866)来日。
1823 文政6	シーボルトが青貝屋に注文か(青貝屋、難船の損を蒔絵物の注文で補う)。	受注：青貝屋武右衛門	【青貝屋武右衛門同武兵衛資金借用願(公財)三井文庫本 1472-16-7】	青貝屋は8月1日に13貫目あまりの荷を積み入れた金吉丸が平戸において難破し、この船の商品をすべて失う。
1824 文政7	ワット・ナーンチー(Wat Nang Chi)の伏彩色螺鈿扉(日本製輸出漆器)の上限。			ラーマ3世の在任期間(1824-1851)に建てられたワット・ナーンチーの拝殿の側面に窓が5か所ずつ計10か所、扉が4か所あり、建物の内部に面した側面に伏彩色螺鈿の装飾がある。
1826 文政9				商館長ステュルレル、外科医シーボルト参府

1830 天保元	1《シーボルト妻子像螺鈿喫きたばこ入れ》 素地は木製クロクロびき、合口部分が内にすばまった形（ヨーロッパの喫たばこ入れと同じ形式）、合口の銀梨地のほかには黒漆、伏彩色螺鈿。シーボルトの妻たきがシーボルト帰国後に注文して作らせてシーボルトに送ったもの。シーボルトが1859年に再来日した際に妻子に手渡し、その後楠本家から長崎市に寄贈された。 蓋表（たき）：修理有；黒漆線の上書は後補か。 蓋裏（いね）：修理なし。 2《いね肖像螺鈿喫きたばこ入れ》 素地は木製ろくろびき、合口部分が内にすばまった形（ヨーロッパの喫たばこ入れと同じ形式）、伏彩色螺鈿。たきがシーボルトの母親に贈ったもの。 蓋表：いねの肖像を正方形の螺鈿の細い枠で囲む。枠の外側は銀梨地、内側は黒漆。いねの顔の右半分（画面左）が大きく欠失。	発注：シーボルトの妻たき	1シーボルト記念館 2ライオン国立民族学博物館	いね原因：「いね肖像画」フオン・フランドンシュエタイン家蔵 「タキからシーボルト宛書簡」ベルリン日本協会蔵 天保元年（1830）11月15日付 「あなたの母様とあなた様にかきたばこ入夫々一つ一つ差上げます。母様へのはオイネの像、あなたへのは私とおいね像をよく描かせました。」 天保2年（1831）10月24日付 「はなたはこ入においねわもしの画をしるしおくらせまいらせ候間よくよく御らにいねのえつ付候方はか、様へ進じまいらせ候わもしのえつ付候方はお前様へ進じまいらせ候」 ※シーボルトが持ち帰ったとする作品解説が見られるが、上記書簡よりシーボルトの妻たきが発注して送ったことが知られる。シーボルトとの関係が資料で確認できる青貝屋（京都）か、肖像画の画風から長崎の画家が関与しやすいため、長崎で製作したものか、判断に迷う。《フリードリヒ2世肖像図ラケット》から進んだ写実的な表現の伏彩色螺鈿の先駆例と位置づけてもよいものか。 【海のシルクロード】神戸市立博物館、1982】
1831 天保2	《亀山焼青貝入漆塗五段重》 磁器に黒漆と螺鈿で裝飾、伏彩色なし。 段重内側には、鯉・川鯉・鮒など川魚5種と水藻の染付文様を配する。同様の文様の亀山焼（長崎歴史文化博物館蔵）に天保3年の銘あり。 箱書：蓋表「外黒塗螺色青貝松葉模縁五段蓋物 一組 / 徳岡」蓋裏「天保二年 / 卯正月調之」	亀山焼・国内向	長崎歴史文化博物館	天保2年正月に大國町（長崎）の乙名「徳岡」（6代目勇之丞か）が注文。伏彩色はない。陶磁器に螺鈿加飾する先行例か。 ※《青貝細工花鳥文絵磁器四段重》神戸市立博物館 磁器に黒漆、伏彩色螺鈿、毛彫りあり。
1832 天保3	「連年損毛打続候未之儀二付、是迄之姿二而者相続難相成候二付、当二月長崎宅内中町迄逼塞仕候而、此節上京仕候京宅も当節逼塞仕候二付…」	青貝屋	【奉願候口上書】（公財）三井文庫別1354-51	青貝屋は、長崎・京都の両家とも逼塞。 ※長崎の業者の参入 青貝屋が立ち行かなくなった最大の要因は天保11年頃以降に長崎の業者が参入したことにある。新株出入りの内、尾道屋次郎太は大通詞権林鉄之助の内縁、嘉納屋善次は小通詞岩瀬弥七郎と本木品蔵の内縁、松屋與兵衛は通詞達の世話をする立場の人物で、通詞からオランダ人たちへの取持があったという。
1840 天保11	「兼而塗り物商売明キ株御座候処、近年長崎会所銀繰り宣敷相成候二付而者、七八年以前 追々同商売仲ケ間三四件茂相増、右二付通詞役人二内縁有之候者茂御座候而、兎角商売すじ二依怙最貞之沙汰御座候」 「外交多端の天保年間を過ぎて弘化に至り稍や宇内の擾乱下火に傾きしかの時より貿易の趨勢も随ってツツて順境に復しし来り漆器も亦た製作を再びするに至り…」 「有力なる漆器業者として豊後町の尾道屋（尾道八郎氏）袋町の松屋（石崎太兵衛）銅座の江上（奥助氏）東浜町の品川（徳三郎氏）等は奮励唱道して…」		『沿革史』	※青貝屋、笹屋ともに天保年間も輸出漆器商として商売を継続している。弘化年間の有力漆器業者として名前の上がる豊後町尾道屋（尾道八郎）、袋町松屋（石崎太兵衛）が天保11年に新規参入した業者か。
1841～78 天保12～ 明治11	《花鳥螺鈿藏春亭瓶入箱》 箱の素地は木製、いすれも伏彩色螺鈿。 1瓶蓋上に「藏春亭三保造」銘のある色絵角瓶2本が納められた蓋付箱。	「藏春亭」有田磁器と伏彩色螺鈿漆器の組み合	1国立歴史民俗博物館 2ミュージアム漆芸美術館・東	天保12年、有田の商人久富与次兵衛昌保（？-1878）はオランダ貿易を再開。翌年には佐賀藩から輸出向け有田焼の独占販売権「鑑札」を得て、長崎出島に支店を設けた。「藏春亭」は佐賀藩主から与えられた屋号。「三保」は昌保の号「山敵」と通音。 「藏春亭三保」銘の製作年は天保12（1841）-明治11（1878）。

				2瓶蓋上に「蔵春亭三保造」銘のある色絵の6弁花形瓶（東博は瓶が3本）が納められた蓋付箱。（蓋は上と左右に開く）。3瓶底に「蔵春亭三保造」銘のある色絵角瓶4本が納められた蓋付箱。	わせ作例	京国立博物館 3長崎歴史文化博物館	【鈴木田紀夫「明治有田の変遷—銘款を中心として—」『有田焼創業四百年記念明治有田超絶の美万国博覧会の時代論考集』西日本新聞社、2015】 【『明治維新150年記念展 幕末明治有田の豪商—蔵春亭と肥後山信甫—』佐賀県立九州陶磁文化館、2018】 【東京国立博物館データベース】
参考				「松尾政治あり八幡町に住して元は長崎陶山（亀山）の画工たりしが後ち青貝細工に志して遂に其一派を施したるが其功績また視るべきものありたる」	松尾政治	『沿革史』	松尾政治（安政5年没）は亀山焼と伏彩色漆器を結びつける人物か。
1844 天保15				商館長が商品を注文する「定式出入商人」として「青貝師 木屋町松原下ル 青貝屋武右衛門」 「塗り物釜もの類 三条河原町西へ入 笹屋勘助」	青貝屋 笹屋	【『御用留日記』 「阿蘭陀宿村上家文書 No.14」 神戸市立博物館】	青貝屋、笹屋ともに天保年間も輸出漆器商として商売を継続している。（天保10年、嘉永3年にも同様の記載）
1844 弘化元				「早速大坂船問屋江積下し諸向紅毛行之出荷物在之候ハ、積合、早々差下し候様申遣し候處、幸ひこんふら笹屋叶屋之荷物何れも紅毛注文之荷物ニ有之候ニ付、三百六拾石積之船借入候而、積合可仕旨申越候ニ付…」	青貝屋武右衛門	【青貝屋武右衛門殿取替銀相談覚…」（公財）三井文庫 本1038-1】	青貝屋は紅毛行の品物を大坂の船問屋で他の業者の紅毛注文の品と積み相にし、その相手は笹屋と叶屋とある。この記述は、青貝屋のみならず笹屋についても、輸出入の漆器の製作がこの時期においても京都において行われ、製品を長崎へ積み下したと判断するひとつの論拠となる。
1845 弘化2				「去夏入津渡来之脇荷物掛りピツケルと申組毛人出帆之朝…無難入津ニ相成、品々出嶋江持入シ候處、右ピツケル儀者昨年入津仕候本國船と何角訳テ合御座候趣ニ而、右同人儀に彼地差留メニ相成候、依之渡海無御座、右代りとしてテルゾブラツトと申組毛人渡来仕候、右ニ付前年注文之品々早速為相見申候所、右テルゾブラツト儀者花鳥草花之模様相好申候、尤先役ピツケル儀者山水模様相好而、何品ニ不寄多分山水模様ニ相成り御座候ニ付、彼是故障被申立候…」	青貝屋武右衛門	【青貝屋武右衛門殿取替銀相談覚…」（公財）三井文庫 本1038-1】	天保10年（1839）からオランダ船の脇荷物掛を動いていたピツケルが、弘化元年夏入津にあたって本國船との間でトラフルがあり、弘化2年夏のオランダ船は、テルゾブラツトが脇荷物掛として渡来。ピツケルが前年注文した品はすべて山水模様であったが、テルゾブラツトは花鳥の模様が好きなので、青貝辞絵物から屏風や焼物に至るまで花鳥草花の模様柄でなければならぬため、青貝屋は山水模様の品物の多くが売れ残り、結局塗り直しをする他ないと判断して、長崎まで積み下した商品を京都に送り返す。
1845 弘化2				「たばこ入れ、鼻煙草入、筒煙草入、大さじ入、小さじ入、イ印台針さし、盆付台針さし、新亀甲形針差、布袋形針さし、大茶箱、中茶箱、日月箱、大々ひいなん、大かるた箱、大れつせん、小れつせん、平れつせん」など31種の品名と数量、代価のリスト。	青貝屋龍助・青貝屋武右衛門	【『蔵囲ひ品物御届帳』（公財）三井文庫 本1679-4】	売れ残ったため長崎で蔵囲いとなった輸出漆器のリスト。
1845 弘化2				〈大簞笥、イ印針さし、大丸飯台、大れつせん、小同、丸タアフル、角見台、巻煙草入〉	青貝屋龍助・青貝屋武右衛門	【『午春注文物銀高御届帳』（公財）三井文庫 本1679-5】	弘化3年春のための新商館長とオランダ人の注文リスト。
1848 嘉永元				「唐商共江売込候品之儀は、前々より仕来有之事に候得共、青貝細工物之儀は唐商共古来より相好み候品ニも無之處、近来多分之注文有之候よう、利欲に耽り、対談取極置候儀をも令忘却、細物屋一手に限り候様心得違致、阮に此の度、金具屋を相手取、及出訴候次第に至候へは、畢竟手輕之品ニ付（中略）細物江青貝細工相好候節は、細物屋にていたし、金物に青貝細工相好候節は、金具屋にていたし、右に准し、遠眼鏡又は方針屋等、其外何に寄す、売込之品江青貝採色相重候は、唐人屋敷売込人分は、何れも、青貝付売込候とも、差障り申間敷、相互手広く渡世可致事」		【『寄合町諸事書上控帳』長崎歴史文化博物館】	近年、唐人屋敷の商人との取引が増えてきた青貝細工について、細物屋（小間物屋、笹屋や青貝屋などの商人を指すと考えられる）が独占販売の権利を主張したところ認められず、金具屋、遠眼鏡又は方針屋等、長崎の工芸商がそれぞれ青貝加飾して貿易する実態を示す。 ※長崎製の伏彩色螺鈿細製品が中国商人の手を経て輸出されている。タイへの輸出漆器の経路と考えられるか。 【『日本都市生活資料集成』6、学習研究社、1975】

1849 嘉永 2	「昨年テラロ フ井二紅毛人注文物請負仕品物相揃不申相断候而者、出嶋出入仕候 難茂相立不申」	青貝屋龍助	【青貝屋龍助仕 入元手銀拝借願】 (公財) 三井文庫 本 1498-12-21	前年の脇荷物掛テラロフ井は帰帆の際大風にあい 400 貫の損失を出して脇荷物 掛を解任され、この年はテラロフ井に変更。 ※青貝屋はオランダ商売において契約不履行に陥る。
1849 嘉永 2	《西洋紋章入螺鈿喫き煙草入》 素地は木製？、総体黒漆、蓋表は青と赤の伏彩色、蓋裏に紡錘形の 草花文様を表しその内側に金蒔絵で銘、身の底に伏彩色のない捲開 山水文様。 内部に蒔絵で「出島の記念に 1849年11月3日 Dr Otto Mohmike」(原 文はオランダ語か)。 【国立歴史民俗博物館データベース】	国立歴史民俗博 物館	国立歴史民俗博 物館	オットー・モーニツケ (Otto Gottlieb Johann Mohmike 1814-87) はドイツの医師。 日本に牛痘苗をもたらし、日本の天然痘の予防に貢献した。
1850 嘉永 3	「嘉永三年の頃より浅田 (長藏) 三田村 (大兵衛) 等の諸氏十二名 も亦た其筋の特許を得て長崎の出嶋に商館を新設し初めて民間貿易 の端緒を開き各種製作製品の貿易に従事したる」	浅田屋長藏	国立歴史民俗博 物館	『青貝蒔絵雛形扱』(安政 3 年 長崎歴史文化博物館) を所蔵していた浅田屋が出 嶋に商館を新設し貿易に従事し始める。 【林虎松編『著名物産長崎漆器沿革史』丸一家具合資会社、1903】
1851 嘉永 4	《猿の脚付黒漆螺鈿花鳥図テラロフ》 素地は木製、伏彩色螺鈿、脚は猿の作り物。1851年のロンドン万 国博覧会出品の本作をデボンシャー卿 (Duke of Devonshire 1790- 1858) が購入。 【Sotheby's CHATSWORTH: THE ATTIC SALE 05 OCTOBER 2010-07 OCTOBER 2010】			ロンドンで万国博覧会が開催される。日本は国として出品していないが、 'HONOURABLE MENTIONS (公式記録)' の 'OBJECTS REWARDED' に 'Japanned ware' の記載がある。 【Exhibition of the Works of Industry of All Nations, 1851: reports by the juries on the subjects in the thirty classes into which the Exhibition was divided. Spicer Brothers, 1852】
1851 嘉永 4	《花鳥螺鈿裁縫机》 素地は木製、伏彩色螺鈿、蒔貝の土坡、花は伏彩色、孔雀はなし。 正方形の切貝が桜・牡丹の枝に沿って数列かためて並べられる。 蒔絵銘「Aan mijn beste vriende/ G. V. M. Nagasaki, 1851/ Van Maanen」。 【中尾優衣「蒔絵技法から伏彩色螺鈿技法への移行 19世紀前半に おける「長崎青貝細工」の制作について」『京都国立近代美術館研究 紀要』1、2008】	東京国立博物館	東京国立博物館	落合與惣治 (素行 1830-85) の経歴に、「人物花鳥魚貝などの類に妙を得、油絵を 描き、外人の需めに応じて本邦の動物を描きまたは模造してその業とし、漆器を 博覧会などに出席」とある。猿の作り物の脚と関係するか？ 【林虎松編『著名物産長崎漆器沿革史』丸一家具合資会社、1903】
1851 嘉永 4		青貝屋龍助	【青貝屋武右衛門 方仕法書 (中野 用助) (公財) 三 井文庫 本 1670- 20】	青貝屋 (龍助) がオランダ商売の株を失う。これ以降に登場する「青貝屋民助」 は中野用助配下の半田民助 (長崎の業者)。

1851 嘉永4	ワット・ナーンチー (Wat Nang Chi) 伏彩色螺鈿扉の下限。			ラーマ3世の在任期間 (1824-1851)
1853 嘉永6	「御店様之御蔭ヲ以愚父 紅毛商売仕候也、終二者從御店様莫大之御 忍借二相成殿敷蒙御呵り重々奉恐入候、隨而右御銀御返上仕候手立 茂無御座候二付、出嶋出入株并長崎居宅御引取被為成下候様御敷願 奉申上候」	青貝屋龍助	【青貝屋龍助合 力銀請取二付札 証文】(公財)三 井文庫 続759- 1-7】	青貝屋の終焉。
1854 安政元	「長崎の漆工界は嘉永の末年に至りて名手落合興惣治氏の出づるに 会ひ當時の漆工界と漆器製作上に対して大改革を来したるに及びて …」	『沿革史』		落合興惣治 (素行 嶋原町 1830-85) が青貝細工に改良、斬新な意匠。父は京 都より移住の仏師屋。人物花鳥魚貝などの類に妙を得、油絵を描き、外人の需め に応じて本邦の動物を描きまたは模造してその業とし、漆器を博覧会などに出版
1854 安政元	《日本風景・風俗・花鳥図小簞笥》 素地は木製、伏彩色螺鈿。 安政3年の浅田家『青貝蒔絵雛形』に近い形の簞笥あり(金具の様 式は異なる)。			1844年から中国ミツジョンに参加し、1848年に上海・寧波に寄港したジャンルル ド・モンテイニ (Charles de Montigny 1805-68) が1854年にパリに持ち帰る。
1856 安政3	『青貝蒔絵雛形控 浅田記』 ※「亀甲形角立針差(裁縫箱)図」「布袋形針差図」「持渡り飯臺(テ ーブル)ノ図」など、安政期の輸出漆器の様式を具体的に示す資料。 《朱漆地花鳥螺鈿丸テーブル》など、本雛形に近似する輸出漆器が 各所で確認できる。 【『日本の美術』427、至文堂、2001】	浅田屋長藏	長崎歴史文化博 物館	『青貝蒔絵雛形控』中の墨書 04「紅毛人注文之内 巾式尺」 15「さし渡三尺 梅ちらし」(蝙蝠脚テーブル) 16「新形飯臺足 新形雪輪形飯臺 三尺」(蝙蝠脚テーブル) 17「鳥ノ臺下此通り 持渡り飯臺足ノ図 甲坂ウハバヨリ下ノ車笠式尺六寸 金 車」(鳥脚テーブル) 18「此飯臺持渡木地にて差渡シ三尺六寸丸 尤図之通縁付二仕立ル ちち付飯臺 図之通り」 20「布袋形針差図 針差内仕切爪此通り 亀甲形角立針差図」 21「花形中飯臺 花形金地盆 角丸金地盆」 23「盆附カルタ箱但シ小箱ハ四ツ入」 24「万屋町長藏 木地屋長藏仕入四本之分 レッセン附上ひらき」 25「諏訪町木地屋 弥藏九本 三ツ(折空) キ瓶入コツツたんす」 26「小川町 木地屋藤五郎仕入 富士形足引出シ附臺附レッセン附 上ひらき書 棚 五本 五本」 ※万延元年(1860)に「諸品売込人 浅田屋長藏 蒔絵青貝塗物類」。 ※浅田家旧蔵資料に、鍛冶屋町迎照堂からの銀箱1000枚の納品書や、内容は伴 わないが表題が「貝細工植段帳」(安政5年)とある帳面もある。→伏彩色螺鈿 に銀箔を使用していた根拠のひとつとなる。 【『出島町用取扱掛乙名 萬記帳』長崎歴史文化博物館】
参考	《青貝細工煙管台》 素地は木製、伏彩色螺鈿。	長崎浅田家旧蔵	長崎歴史文化博 物館	長崎製伏彩色螺鈿、製作年は不明。

1858 安政 5	松尾政治没。 「政治と叔明なる白山弥吉は現（明治 36 年）に本社（丸一家具合資会社）工場に於て日々青貝漆器に従業し居れる…政治の子に寅吉と云へる者あり…元来寅吉は蒔絵師なれど俱に漆技の妙を得て世に名望あり」	松尾政治	『沿革史』	安政年間…当時長崎の漆工は漆工 400 人以上に達し其中漆工 300 余、貝師 100 余に上り、漆工中に久留米人が最も多い。
1859 安政 6			【『御用留日記』 「阿蘭陀宿村上家 文書 No.14」 神戸市立博物館】	欧米 5 カ国と通商条約、「自由」貿易の許可。
1859 安政 6	「定式出入商人」として 「塗物類 三条河原町西へ入 笹屋勘助」	笹屋勘助		京都の笹屋はまだ輸出来に関わっている。
1862 文久 2	出島出店商人共売込品立帳（蒔絵青貝塗物類）「伊万里屋与兵衛、伊万里屋文右衛門、伊万里屋栄次郎、笹屋勝次、尾道屋次郎太、加納屋与一郎、材木屋茂兵衛、青貝屋民助、浅田屋長蔵、富益屋猪之助」	笹屋勝次・青貝屋民助	【『萬記帳』長崎歴史文化博物館】	笹屋勝次は京都笹屋の出店か？ 青貝屋民助は長崎の業者。
1862 文久 2	《浮細工出島図額》 素地は木製、伏彩色螺鈿。 額の切枝紋は小さな花、出島のジオラマは長崎歴史文化博物館所蔵本と同一ではない。	シーボルトコレクション	ミュンヘン五大大陸博物館	シーボルト 2 度目の来日時（1859-62）の収集。
参考	《出島ジオラマ紙細工長崎青貝額録》 素地は木製、伏彩色螺鈿。		長崎歴史文化博物館	
1862 文久 2	《小島文重箱》 素地は木製、伏彩色螺鈿。 「小重函三段物」「文久式歳 戌十月吉辰 調之 米屋家用」	国内向	長崎歴史文化博物館	第 2 回ロンドン万国博覧会開催。 日本からの正式な出展はなかったものの、日本の工芸品が展示されていた。イギリス初代公使オールコックが自身で集めた品。「全く骨董品の如く雑具」（日本使節団）
1864 文久 4	ワット・ラーチャプラデット（1864 年創建）の伏彩色螺鈿の扉と漆絵。			漆絵のひとつと（表）図様が共通する長崎の画家石崎融済（1810-62）筆「和合神図」（長崎歴史文化博物館）あり。 漆絵のひとつに落款あり。「叟郷 画指 蒔絵工 六十六 / 壬戌？」と読めるか。文久 2 年（1862）が壬戌。
1866～ 慶応 2～	「塗物問屋 寺町三条下 笹や喜介」	笹や喜介	【『都商職街風聞』	京都笹屋の名前と地所が変わる。
1858～66? 安政 5～慶 応 2	《西洋港図風炉先屏風》 素地は木製、伏彩色螺鈿。周辺の葉に毛彫り。蒔絵装飾あり。裏面は竹細工に更紗。 箱書「御小屏風 片 / 表紅毛青貝細工唐船之図 / 裏さらさら張」箱襖貼紙「御小屏風紅毛青貝細工 御内證之御方お御上ケ」	紀州徳川家伝来・国内向	長崎歴史文化博物館	原図：サンクト・ペテルブルグ港を描いた銅版画か。 「御内證御方（將軍となる男子の母）」が実成院（1821-1904 紀州藩主徳川斉順の側室で江戸幕府 14 代將軍徳川家茂（在位：1858-66）の生母）とすると、製作年が絞られる。

1866～ 慶応2～	《長崎風物図箱》 木製、伏彩色螺鈿。 伏彩色に陰影表現するなど非常に細かい。周辺装飾の貝の裏に金箔使用。		長崎歴史文化博物館	原因： 「東アジア使節公式報告書 フロシヤ国（第2巻）」1866年 「芝居の一場」写真 長崎大学附属図書館 1861-62年頃 「相撲」写真 長崎大学附属図書館 1861-62年頃 「出島と牛」写真 長崎大学附属図書館 1861年など 【幕末長崎古写真—ポードインコレクション—】長崎歴史文化博物館、2015】
1870 明治3	興善町の永見栄次は漆器を製造し、非常の巨額を輸出する。		『沿革史』	（長崎の）漆工も再び増加 中村重吉（京都博覧会）。
1875 明治8	本籠町本田藤三郎氏の漆器業やや活気を示す。	本田藤三郎	『沿革史』	
1877 明治10	第1回勸業博覧会に落合素行は「長崎港軍艦停泊の図」「浮細工外国船入港の図」を出品し龍紋賞牌、永見栄次は鳳紋賞牌。	落合素行・永見栄次	『沿革史』ほか	第1回勸業博覧会開催。
1878 明治11	『明治十一年 塗物雛形控』 「明治十一年寅三月廿五日 此雛形帳別二拵 出嶋ホーテンハウスニ出し置」	林家旧蔵	長崎歴史文化博物館	丸一家具の後裔林家の旧蔵。
1887 明治20	デンマーク大学に長崎漆器の標本50枚寄贈。		『沿革史』	明治10年代に低調であった長崎漆器の海外宣伝として。
1887 明治20	『明治十一年 塗物雛形控』 「亥五月廿日 出嶋九番ホーテンハウスヨリ注文」	林家旧蔵	長崎歴史文化博物館	『塗物雛形控』の使用は10年以上か？
参考	《花鳥螺鈿衝立》 素地は木製、伏彩色螺鈿、蒔貝。 表は花鳥・裏は風景。 「笹屋老店」「三木堂作」の貼紙あり。	笹屋老店・三木堂	国立歴史民俗博物館	ベルギー国王レオポルド2世の娘ステファニー（1864-1945）の居城にあった「日本の間」旧蔵。 ※安政年間に「三木（七兵衛補屋町の住）等の漆工名声を得たる」などとなり、「三木堂作」との関係が疑われる。笹屋老店と京都笹屋の関係を考える必要があるか。 【URUSHI おしき物語—人と漆の1200年史—】国立歴史民俗博物館、2017】 【林虎松編『著名物産長崎漆器沿革史』丸一家具合資会社、1903】
明治10～ 20年代	「漆器商 長崎本籠町 本田藤三郎」	本田藤三郎	【『崎陽の魁』長崎歴史文化博物館】	テーパーや箆筒が店内に飾られている。
1891 明治24	本田藤三郎が神戸港に支店を開き好況。	本田藤三郎	『沿革史』	明治21年に本業の織箔業を廃して漆器を専業とする。 顧客の好む商品は、花鳥山水の詩絵の丸型テーパー（尺八、三尺、三尺五寸）、開き箆筒、三角双輪台、鏡台、琵琶箱など。
1895 明治28			『沿革史』	日清戦争。長崎漆器の衰退。

1898 明治 31	林虎松が長崎漆器の再興を目指す。	丸一家具合資会社	『沿革史』	
参考	《丸一家具漆器部看板》 素地は木製、伏彩色螺鈿。直線的な草花文様。	林家旧蔵	長崎歴史文化博物館	
1902 明治 35	丸一家具が日本漆工会第六次漆工競技会に出品。	丸一家具合資会社	『沿革史』	黒塗螺鈿尺八卓子一脚が御用となる。
1903 明治 36	第5回勸業博覧会（大阪）の工業館の諸塗物類に螺鈿漆器（卓子、文庫、書棚、簞笥、隅棚の類）及び蒔絵漆器などを出品。	丸一家具・山本丈太郎	『沿革史』	博覧会塗物部への長崎県の商品は丸一と山本丈太郎のみ。
1914 大正 3	白山弥吉死去。その後丸一家具が経営休止。	丸一家具合資会社		【林源吉「長崎名物考 其二」『長崎談叢』2、1928】